

国立民族学博物館の収蔵品⑦

中国のコーラン



写真1 国立民族学博物館「中国地域の文化」に展示されているものと同様の中亜対訳コーラン（筆者撮影）

中国には二〇〇万人ほどのムスリム（イスラム教徒）が暮らしており、その半数ほどを回族と呼ばれる人々が占める。回族の間では、写真1のようにアラビア語原文と中国語訳文を併記した中亜対訳コーランが最も普及している。イスラーム（イスラム教）では、礼拝を行う際にアラビア語でのコーラン朗誦が必要となる。中亜対訳コーランの普及は、回族の多くが礼拝のためにアラビア語でコーランを読む一方、中国語でその意味を理解していることを示唆する。実際、多くの回族の母語は中国語であり、日常生活でアラビア語を話す者はほとんどいない。回族は中国で暮らしており、中亜対訳コーランの普及は当然の結果のように思える。しかし、彼らの歴史に目を向けると、中亜対訳コーランの普及は彼らが中国においてムスリムとしてのあり方を模索してきた結果として立ち現れる。

回族は主に唐代から元代にかけて中国に移住したアラブ人などの外来ムスリムとイスラームに改宗した漢人との通婚の繰り返しの結果により形成された民族集団だとされる。後に回族と呼ばれることとなる外来ム



写真2 1994年に中国雲南省で出版されたテキストにおけるコーランの章句（筆者撮影）

スリムは時代により程度の差こそあれ、元代までは政治的、経済的、社会的に優遇された。しかし、漢化政策が採られた明代に至ると、ムスリムたちは名前や服装を中国風に改めなくてはならなくなり、共通語も中国語となった。結果、コーランなどのアラビア語経典を原文で理解できない状況が生まれ、その後、現在に至るまで、彼らのあいだでは中国語教育とアラビア語教育の両立が常に問題とされてきた。

明代にはイスラーム教育において「小児経」^{シャキールジン}などと呼ばれるアラビア文字やペルシア文字での中国語表記のテキストが使用されたという。これは当時のムスリムたちが中国語の話者ではあるが非識字者であり、アラビア文字の読み書きはできるがアラビア語を理解できない状況にあったことを示している。

その後、清朝末期から民国期にかけて学校教育が普及すると、中国語教育が重視され「小児経」は廃れていった。新中国建国から文化大革命に至るまでの宗教教育の実施が困難な時期を経て、改革・開放以降に活発化したイスラーム教育で使用されたテキストは、「小児経」とは対照的にアラビア語原文に漢字による音訳を併記したものであった（写真2）。これは回族が中国語の識字ができる一方、アラビア文字の読み書きはできない状況に対応したものであった。

しかし、アラビア語の漢字表記ではコーラン朗誦が中国語訛りになってしまふ。改革・開放以降、イスラーム復興の進展に伴い、標準的なアラビア語でのコーラン朗誦が重視されるようになると、アラビア語の漢字表記は姿を消し、アラビア語原文と中国語訳文を併記するテキストが一般化した。中亜対訳コーランはこうした回族の歴史的变化の中に位置づけられる。（奈良雅史）